The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 原因・理由を表す接続助詞の切換え |
| Author(s) | 松丸, 真大 |
| Citation | 阪大社会言語学研究ノート. 2003, 5, p. 97-113 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/23200 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第5号（2003年3月）97-113

# 原因・理由を表す接続助詞の切換え

松丸　真大

【キーワード】原因、理由、接続助詞、スタイル、切換え

【要旨】

本稿では、東京下町方言話者と高知幡多方言話者が用いる原因・理由接続助詞をとりあげ、場面間の切換え現象を中心に考察を試みた。その結果、以下の点が明らかとなった。

(a) 用法・文型の点で考えると、東京下町老年層話者の場合はノデの用法・生起できる文型が限られており、カラとは完全に対応しない。これはノデが文法化の途上にあり、カラとのバリエーション関係にまで至っていないことによるものであろう。

(b) 丁寧形式との共起の点から見ると、両地域の若年層話者は、丁寧さという軸を基準としてそれぞれノデ対カラ、ノデ・カラ対ケンという切換えを行っていると考えられる。

(c) 切換えが見られる話者の場合でも、高知老年層話者は丁寧さを基準として切換えを行っておらず、相手が方言話者か否かを基準としていると考えられる。

(d) 東京若年層話者の場合、原因・理由の接続助詞としての典型的な用法・文型からはずれたところで、両形式にスタイル的意味が付与されるという言語的な制約条件が働いている可能性がある。

## 1. はじめに

本稿の目的は、ノデ（ンデ）・カラといった、原因・理由を表す接続助詞の切換え現象について記述を行い、そのメカニズムを明らかにすることにある。松丸・辻（2002）や高木（2002）の考察では、ある場面でカラを用いるのかノデを用いるのかというように、形式の対立だけに注目している。しかし、このような分析では言語外的条件（場面）と切換えの関わりにしか注目できなかった。そこで本稿では、意味や文型などを手がかりに、より詳細に見ていくことにする。その中で、原因・理由の接続助詞の切換えはどのように行われているのか、そもそもある言語項目を切換える／切換えないということは何によって決まるのか、という点について考察する。また、本稿では2方言の資料を用いて分析を行うが、2方言間の対照を通じて、その共通点・相違点を明らかにし、スタイル切換え現象の方言類型論の基礎データを提示したい。

以下、§2では本稿で用いる資料について述べ、§3で本稿の問題とする点について論じる。これを踏まえ、§4で具体的な分析を行う。

## 2. 資料

本稿では、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室の SS コーパス ver. 1.0 のうち、東京下町方言話者と高知県幡多方言話者のデータを資料として用いる。表 1、2 に東京下町データの情報（松丸・辻 2002：33 より抜粋）を、表 3、4 に高知幡多データの情報（高木 2002：55 より抜粋）を示す。

〔表 1　東京下町：インフォーマント情報〕

| | 年齢 | 職業 | 居住歴 |
|---|---|---|---|
| SA | 70 | 元寿司職人・乾物屋 | 0-60：東京都中央区、60-：千葉県柏市 |
| SC | 85 | 元呉服屋・現ビルオーナー | 0-：東京都中央区（兵役 5 年があるが地域は不明） |
| YA | 21 | 寿司職人 | 0-：東京都中央区 |
| YC | 21 | 学生 | 0-1：福島県福島市、1-：東京都中央区 |
| YF | 28 | 学生 | 0-15：京都市左京区、15-23：東京都江戸川区、23-：大阪府池田市 |

〔表 2　東京下町：談話情報〕

| | 話者 | 話者間の関係 | 収録時間 | 談話の展開 |
|---|---|---|---|---|
| 老－老*1 | SA－SC | 親しい同年代 | 32 分 | SC が多く発話 |
| 老－若 | SA－YA | 祖父と孫 | 30 分 | YA が質問、SA が答える |
| 老－調*1 | SA－YF | 初対面 | 28 分 | YF が質問、SA が答える |
| 若－若 | YA－YC | 親しい同年代 | 38 分 | 同程度の発話量 |
| 若－調 | YA－YF | 初対面 | 28 分 | YF が質問、YA が答える |

*1　SA よりも SC が年上であるせいか、SA は「老－老」で丁寧体を用いる。逆に「老－調」では、（場面設定の意図に反して）さほど改まっていない。この点で当該方言の資料は他地域の資料と異なる。

〔表 3　高知幡多：インフォーマント情報〕

| | 年齢 | 職業 | 居住歴 |
|---|---|---|---|
| SA | 76 | 農業 | 0-18：高知県宿毛市、18-19：中国（関東州）、19-21：中国（満州）、21-：高知県宿毛市 |
| SC | 77 | 石屋 | 0-21：高知県宿毛市、21-22：高知市朝倉、22-：高知県宿毛市 |
| YA | 16 | 学生 | 0-2：東京都目黒区、2-16：高知県宿毛市、16-：愛媛県大洲市 |
| YC | 16 | 学生 | 0-16：高知県宿毛市 |
| YF*1 | 26 | 学生 | 0-15：京都市左京区、15-23：東京都江戸川区、23-：大阪府池田市 |

*1 東京下町データの YF と同一人物

〔表 4　高知幡多：談話情報〕

| | 話者 | 話者間の関係 | 収録時間 | 談話の展開 |
|---|---|---|---|---|
| 老－老 | SA－SC | 親しい同年代 | 30 分 | SA が多く発話 |
| 老－若 | SA－YA | 祖父と孫 | 30 分 | YA が質問、SA が答える |
| 老－調 | SA－YF | 初対面 | 30 分 | YF が質問、SA が答える |
| 若－若 | YA－YC | 親しい同年代 | 35 分 | YC が多く発話 |
| 若－調 | YA－YF | 初対面 | 30 分 | YF が質問、YA が答える |

上表の話者記号は、最初のアルファベットが話者の年層を表す（S＝老年層、Y＝若年層）。

また、2つ目のアルファベットは話者の属性を表す（A＝分析対象話者、C＝カジュアル場面の話し相手、F＝フォーマル場面の話し相手（＝調査者））。また、談話情報の「老」「若」「調」は、それぞれ老年層話者（SA・SC）、若年層話者（YA・YC）、調査者（YF）を指し、場面を示す場合に「SAの《対調》」のように《対…》という形式で示すことがある。なお、以下では東京下町方言話者について言及する場合は東京SA・東京YA、高知幡多方言話者について言及する場合は、高知SA・高知YAのように表記する。また、談話例をあげる場合には、〔東京：若ー若〕のように、〔地域名：談話名〕という形式で示すことにする。

## 3.　問題の在処

まず、詳細な分析に入る前に、両データにおける原因・理由の接続助詞の大まかな分布を示しておく。以下の表を参照されたい。なお、以下のデータはコーパスをもとに筆者が集計し直したものである。松丸・辻（2002）や高木（2002）の結果と頻度数が異なるのは、（ⅰ）原因・理由を表すと考えられるものは全て集計した（特にノデに関して）、（ⅱ）他人の発話の引用などは除外した、（ⅲ）東京SAの「てゆーんで（てゅんで、つんでを含む）」のノデ（11例：《対老》1例、《対若》7例、《対調》3例）を除外したことによるものと考えられる。[1)]

〔表5　東京下町〕

| | 老（SA） | | | 若（YA） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 対老 | 対若 | 対調 | 対若 | 対老 | 対調 |
| ノデ*1 | - | 1 | 2 | 1 | - | 18 |
| カラ | 16 | 30 | 21 | 29 | 5 | 24 |

*1　ンデを含む。以下同様。

〔表6　高知幡多〕

| | 老（SA） | | | 若（YA） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 対老 | 対若 | 対調 | 対若 | 対老 | 対調 |
| ノデ | - | - | - | - | - | 40 |
| カラ | 1 | 1 | 14 | - | - | 2 |
| ケン | 44 | 36 | 10 | 27 | 4 | - |

上の2表からわかることは、

(1)　東京SAはノデをほとんど用いない。用いるとしても場面間でその現れ方がさほど変わらない。つまり、この項目で切換えていないと考えられる（ただし数が少ないため、はっきりとはわからない）。

(2)　東京YAは《対調》でノデを多く用いる。すなわち、接続助詞による切換えを行っているものと考えられる。

(3)　高知SAはカラとケンを用い、連続的な切換えを行っている（《対調》で多い）。

(4) 高知 YA は方言話者に対してケンを、相手が方言話者ではない《対調》ではノデ・カラを用い、カテゴリカルな切換えを行っている。

の 4 点である。これらの話者を切換え方という観点でタイプ分けすると、

タイプⅠ：切換えないタイプ（東京 SA）

タイプⅡ：連続的な切換えタイプ（東京 YA、高知 SA）

タイプⅢ：カテゴリカルな切換えタイプ（高知 YA）

の 3 つに分類できることがわかる。

ここで、切換えという観点から問題となるのは、

(a) タイプⅠ（切換えない話者）と、タイプⅡ・Ⅲ（切換える話者）の違いは何か

(b) タイプⅡの切換えがどのように行われているか

の 2 つであろう。また、方言対照という観点から考えると、

(c) 方言形式と標準語形式という対立が存在する高知方言話者の切換えと、そのような対立が（意識され）ない東京方言話者の切換えではどのような違いがあるのか

ということが問題になると考えられる。そして言語変化の点では、

(d) 両地域の SA はノデを（ほとんど）用いないのに対して、YA は多く用いている。このような変化と、切換え現象はどのように関わるのか

ということが問題となろう。

本稿では、主に (a) (b) の問題をとりあげ、(c) (d) については若干ふれるにとどめる。また (b) の問題については、場面間の切換えと場面内での切換えの 2 つを検討しなければならないが、ここでは場面間の切換えを中心に現象の整理をおこなうことにする。

以下では、そもそもノデ・カラが理由を表すのか否かという用法の点（§4.1.）、そしてどのような文型で用いられているのかという統語的な観点（§4.2.）の 2 点から、まず (a) の問題について検討する。そして (b) の問題については、丁寧形式と共起するか否かという形態的／スタイル的な観点から分析をおこなう（§4.3.）。これらの結果を踏まえ、§4.4. では地域差・年齢差（(c) (d) の問題）について考察する。

## 4. 分析

### 4.1. 用法による分析

カラに「理由を表さない用法」があることは既に論じられている（cf. 白川 1995）。例えば以下のようなものである（白川 1995 では後件に命令・依頼・勧誘などがくるものを分析しているが、ここではそのような例が無いため、後件が存在しない例をあげる）。

〔1〕

049SA:うん。でー　大体はー、商売ったってさ(YA:うん)まーーー。寿司屋ったってね？(YA:うん)芸者の

→　手しか、握ってない**から**ね？{笑い}(YA:{笑い}){笑い}だけど、買い出しの　夢とかね？

〔東京:老ー若〕

〔2〕

213YF:今　一番　高いの　どこですか、都内の　な、都区内で、

214YA:銀座、四丁目とかじゃないすか？

215YF:赤坂よりも？

216YA:{息を吸う}どーなんすかねー、昔ー　聞いたの　俺　そー、きーきましたけどね、(YF:はー)　今

→　　駐車場　赤坂　8万ぐらい　しますからね、

217YF:1ヶ月、

→218YA:はい、でも　うちの　近くでも　5万　しますからね、

219YF:あら、うちの　駐車場　1万ですよ。　〔東京:若ー調〕

〔1〕は後件が存在せず、また文脈からも推測することができない。〔2〕はYAの例であるが、〔1〕と同様に「8 万ぐらいするから」の後件にあたる発話が存在しない（むしろ銀座四丁目が最も地価の高い場所であるのなら、「赤坂駐車場8万ぐらいしますけどね」にならなければならない)。

ノデにも同様に理由を表さないものがあるように思われる。以下に例を示す。

〔3〕

→226YA:はーぃ　ぐらい　しますねー、赤坂、昔　赤坂ー、バイト　してたんで、

227YF:あー、あ　僕も　バイト　してたんですよ。

228YA:赤坂で

229YF:はい

230YA:どこですか

231YF:赤坂のですねー、何か

232YA:TBSの　近くですか

233YF:飲み屋なんですけどー、(YA:はい)　赤坂見附のー　駅の　すぐ　近くなんですよ。

234YA:あー、あ　そっちの　方ですか

235YF:はい

→236YA:僕　赤坂駅の　近くなんで、(YF:あーあー)　TBSの、

237YF:TBSの方、

→238YA:はい、ビルジングなんで、(YF:はい　はい　はい)　はい　〔東京:若ー調〕

以下では、「理由を表す／表さない」[2] という枠組みの中でノデ・カラがどのように分布するかを見ることにする。テストフレームとしては、白川（1995）を参考に、「S1 {ノデ／カラ}、S2」という文で「A：S2。→B：どうして？→A：S1」という発話連鎖になおした場合、適切な連鎖になるものを「理由を表す」とした。例えば、〔4〕の例は〔4'〕のように直した場合、適切な連鎖になるため、「理由を表す」ものである。

〔4〕

327YF:えー。あれも、東北の一人とも、生活されたこと　あるんですか。

328SA:ありますよー。

329YF:どう　やっぱり　わからなかったですか。

→330SA:んー　わからん。あのねえ。それ　向こうも　一所懸命　わかるように　話す(S1)**から**ねえ、(YI:はい)

別に　まったく　わからんと　ゆうことは　ないじすよ(S2)(ないですよ)？…略…　〔高知:老ー調〕

〔4'〕　A: 別に全くわからんということはないですよ(S2)

B: どうして？

A: 向こうも一所懸命わかるように話す(S1)から

逆に〔2〕などはこのテストフレームで不適切となる。

〔2'〕　A: (都区内で一番高いのは)銀座4丁目とかじゃないすか？

B: どうして？

A: # 駐車場、赤坂5万ぐらいしますからね

また、〔1〕〔3〕のようにそもそも後件が存在せず、文脈からも復元できないものは「理由を表さない」ものとしたが、聞き手によって発話が遮られたため後件が存在しないもの（しかも後件が文脈から復元可能なもの）は「理由を表す」ものとして考えた。

〔表7〕〔表8〕は、東京下町のノデ・カラ、高知幡多の（ノデ・）カラ・ケンを「理由を表す／表さない」という用法の違いで整理したものである。

〔表7　東京下町〕

| | | 老（SA） | | | 若（YA） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 対老 | 対若 | 対調 | 対若 | 対老 | 対調 |
| 理由○ | ノデ | - | 1 | 2 | - | - | 10 |
| | カラ | 14 | 24 | 15 | 18 | 4 | 16 |
| 理由× | ノデ | - | - | - | 1 | - | 8 |
| | カラ | 2 | 6 | 5 | 10 | 1 | 8 |
| 不明 | カラ | - | - | 1 | 1 | - | - |

理由○：理由を表す　　理由×：理由を表さない　　不明：分類ができないもの

〔表8　高知幡多〕

| | | 老（SA） | | | 若（YA） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 対老 | 対若 | 対調 | 対若 | 対老 | 対調 |
| 理由○ | ノデ | - | - | - | - | - | 31 |
| | カラ | 1 | 1 | 11 | - | - | 2 |
| | ケン | 36 | 27 | 4 | 16 | 3 | - |
| 理由× | ノデ | - | - | - | - | - | 9 |
| | カラ | - | - | 3 | - | - | - |
| | ケン | 8 | 9 | 6 | 10 | 1 | - |
| 不明 | ケン | - | - | - | 1 | - | - |

上表からわかることは、

(1)　東京 SA は理由を表す用法でのみノデを用いる。理由を表さない用法では専らカラを用いている（因みに除外した「てゅーんで」は全て「理由を表す」用法であった）。

(2)　東京 YA は理由をあらわすか否かにかかわらずノデを用いる。

(3)　高知 SA・高知 YA 共に理由を表すか否かは方言形式／標準語形式の切換えに関与していない（高知 YA のカラは例が少ないため判断できない）。

の 3 点である。つまり、タイプⅠ（切換えないタイプ；§3 参照）の話者のノデ・カラは用法の点で対応しないのに対して、タイプⅡ・Ⅲの話者が用いるノデ・カラ（・ケン）はほぼ同じ用法をカバーしていると言える。

以下では、これらの点について解釈を試みる。

(a)　まず、東京 SA の体系内では、ノデとカラが対等の関係にはないと考えられる。すなわち、理由を表す用法ではノデとカラが対立しているが、理由を表さない用法ではノデがその用法を持たないため、対立が無いものと考えられる。これは、SA の体系の中でノデが接続助詞として確立していない（即ち、カラとは違うものとして認識されている）ことによるのではないだろうか。この点は次のことからも分かる。

(a-1)　東京 SA が用いるノデの大多数はカラと置き換えが不可能なものであり、むしろ形式名詞「ノ」＋「デ」として解釈する方が自然である（注 1 参照）。

(a-2)　また、高知 SA がノデを全く用いないことから考えても、両地域の老年層の段階では、まだノデが接続助詞として定着していなかったことが予想される。

以上のように、東京 SA のノデ（ノ＋デ）は接続助詞へ文法化する途上にあると考えられ、そのために「理由を表す」用法に限られるものと考えられる。

(b)　しかし、少なくとも 3 例のノデはカラとのバリエーション関係にある。ノデの文法化が進行し、カラとの用法の違いが無くなるのと並行して、ノデ・カラにスタイル的な意味が付与され、切換えの対象となっていくことが予想される。なお、スタイル的意味と用法の関係については、§4.3.であらためて論じる。

(c)　以上のように東京 SA の結果から、タイプⅠの話者の特徴として、切換え対象の言語形式が担う用法が重ならないという点があげられる。

(d)　次に、東京 YA の体系では、用法の点でノデとカラが同じものとしてとらえられていると考えられ（(2) の分布から）、ノデ・カラが相手によって切換えられている。

(e)　(3) の結果から、高知 SA・YA もノデ・カラ・ケンを用法によって使い分けていないことが分かる。

(f)　(d) (e) から、当該の言語項目を切換える場合、用法の一部でバリエーション関係にあるのではなく、2 形式の用法が完全に同一であるという特徴が見出せる。

### 4.2. 文型による分析

次に、文型によってノデ・カラがどのような分布を見せるのかについて見てみる。ここで言う文型とは、以下のようなものである。

通常型：　S1 {ノデ／カラ／ケン}、S2。

倒置型：　S2。S1 {ノデ／カラ／ケン}。

いいさし型：　S1 {ノデ／カラ／ケン}。

以下にそれぞれの例を示す。倒置型には、自分の発話を受けて S1 を述べるものと、相手の発話を受けて S1 を述べるものが含まれる（下例参照）。いいさし型には、3.1.の「理由を表さない」用法全てと、「理由を表す」もののうち後件が存在しないものを含めた。

〔5〕通常型

089YC:あ そー？ でも やっぱー 髪 切らなきゃ 駄目なの？ 行く 前に。

→090YA:ちゃ 横がね？ ちゃ 帽子 かぶる(S1)**から** 上は どーでも いー(S2)んだけどー、髪型は どーでも いーらしーんだけどー、横が やっぱ、でて、出ちゃうじゃん。(YC:はいはい。) それだけ。…略…　〔東京:若ー若〕

〔6〕倒置型(自分の発話を受けるもの)

→264YA:それ以上 言えないよ。ここでは(S2)。たぶん ひく(S1)**から**。(YC:あー) でもねー、かったるいなー{ため息}8月から 始まりだょー　〔東京:若ー若〕

〔7〕倒置型(相手の発話を受けるもの)

199YF:いー とこですねー(S2)

→200YA:そーぇすねー、都会の わりに 静かです(S1)**から**ねー、　〔東京:若ー調〕

〔8〕いいさし型

117SA:…略…だけど、今 ある その一、名刺の、名刺用の 用紙がね？(YA:うん)紙が 10枚綴りでもって それは あの一 向きませんて 書いてあったんだよ。(YA:うん)俺 気が つかなかったんだ[よ]。で、それを やるにぁ 8枚、の やつを 使ってください って 書いて[あった]。(YA:ん あー

→　そー)だ《だから》 今度ぁ、8枚の [買ってくる](YA:{笑い})俺一、また 作る(S1)**から**。

〔東京:老ー若〕

また少数ではあるが、高知幡多データには〔9〕のように原因・理由節を疑問の対象とするものが見られた。ここでは「疑問型」として扱う。

〔9〕疑問型

374YA:今日ー どこ 行っちょったが？

375YC:高知の奥の方。

376YA:なんで？

377YC:なんか、休みやけん、て。

378YA:あ、家族で？

379YC:うん。

380YA:{咳}あ　マジで？

381YC:うん。

→382YA:ゴールデンウィークやけん？　〔高知:若ー若〕

以下では、この文型によるノデ・カラの分布の違いを見てみる。

〔表 9　東京下町〕

| | | 老（SA） | | | 若（YA） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 対老 | 対若 | 対調 | 対若 | 対老 | 対調 |
| 通常 | ノデ | - | 1 | 2 | - | - | 3 |
| | カラ | 5 | 19 | 9 | 5 | 3 | 5 |
| 倒置 | ノデ | - | - | - | - | - | 7 |
| | カラ | 6 | 5 | 6 | 12 | 1 | 11 |
| いいさし | ノデ | - | - | - | 1 | - | 8 |
| | カラ | 5 | 6 | 5 | 11 | 1 | 8 |
| 不明 | カラ | - | - | 1 | 1 | - | - |

〔表 10　高知幡多〕

| | | 老（SA） | | | 若（YA） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 対老 | 対若 | 対調 | 対若 | 対老 | 対調 |
| 通常 | ノデ | - | - | - | - | - | 23 |
| | カラ | 1 | 1 | 5 | - | - | 1 |
| | ケン | 31 | 19 | 5 | 4 | 1 | - |
| 倒置 | ノデ | - | - | - | - | - | 8 |
| | カラ | - | - | 7 | - | - | 1 |
| | ケン | 4 | 7 | - | 8 | 2 | - |
| いいさし | ノデ | - | - | - | - | - | 9 |
| | カラ | - | - | 2 | - | - | - |
| | ケン | 8 | 10 | 5 | 12 | 1 | - |
| 疑問 | ケン | 1 | - | - | 2 | - | - |
| 不明 | ケン | - | - | - | 1 | - | - |

上表から以下のことがわかる。

(1)　東京 SA は通常型でしかノデを用いない。それに対して、カラは倒置型やいいさし型でも用いられる。

(2)　東京 YA はどのような文型でもノデ・カラの両方を用いる（ことができる）。

(3)　高知 SA・YA も同様に、どのような文型でもノデ・カラ・ケンを用いる。（疑問型については数が少ないためわからない）

これらの点の解釈は以下の通りである。

(a)　(1) の分布から、東京 SA の発話は「～ノデ。」で終わる発話が無く、ノデを用いた場合には必ず後件を述べることがわかる。§4.1.解釈 (a) で述べたように、東京 SA の段階ではノデが接続助詞として定着しておらず、そのため、倒置やいいさしの

ような文型では（文法的に）用いることができないものと考えられる。ノデがB類であることも関係していると考えられそうであるが、(2) の結果を考えると、その可能性は極めて低いだろう。[3)]

(b) 東京YAのノデは§4.1.の結果と同様に、カラが現れるところには全て現れうる。YAの体系内でカラとノデがほぼ同じものとして扱われている可能性がある。

(c) 高知SAのカラ・ケン、高知YAのノデ・カラ・ケンも、文型の違いとは関係なく現れることができる。東京YAと同様に、切換え対象となる項目は文型の制約が無いことがわかる。

以上、§4.1.と§4.2.では、原因・理由の接続助詞を切換える話者と切換えない話者の違いを見てきた。結果から、切換える話者は対立形式が同じ用法・統語的特徴を持つのに対して、切換えない話者の場合は、形式間に用法・文型の違いが存在することがわかった。

### 4.3. 丁寧形式との共起

〔表5〕〔表6〕（§3.）から分かるように、東京YAのノデ、高知SAのカラ、高知YAのカラ・ノデは改まった場面で多く用いられる。ここで問題となるのが、話者は丁寧さ（聞き手に対する配慮）を基準として切換えを行っているのか、それとも別の基準で行っているのかという点である。これは、丁寧さの他に方言と標準語という切換えの軸を持つ高知方言話者の場合、特に問題となる。そこで以下では、原因・理由の接続助詞が丁寧形式（デス・マス）を伴って現れるか否かについて検討してみることにする。

なお、以下の考察では切換えを行っていない東京SAのデータを除くことにする。また、ここでは、《対調》（フォーマルな場面）とその他の場面の違いに注目するため、それぞれのデータの《対老》《対若》を合わせた結果を用いる。〔表11〕〔表12〕に両地域の結果を示す。

〔表11　東京下町〕

| | | 若（YA） | |
|---|---|---|---|
| | | 対老・若 | 対調 |
| 丁寧 | ノデ | - | 1 |
| | カラ | - | 20 |
| 普通 | ノデ | 1 | 17 |
| | カラ | 34 | 4 |

〔表 12　高知幡多〕

| | | 老（SA） | | 若（YA） | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 対老・若 | 対調 | 対老・若 | 対調 |
| 丁寧 | ノデ | - | - | - | - |
| | カラ | - | 7 | - | - |
| | ケン | - | 3 | - | - |
| 普通 | ノデ | - | - | - | 40 |
| | カラ | 2 | 7 | - | 2 |
| | ケン | 80 | 7 | 31 | - |

表から分かる点は以下の通りである。

(1)　東京 YA の場合、《対調》においてノデがほとんど丁寧形式と共起しないのに対して、カラの大多数は丁寧形式を伴って現れる。

(2)　高知 SA のカラ／ケンは、どちらも丁寧形式と共起することが可能である。

(3)　高知 YA のカラ／ノデは、丁寧形式と共に現れることはない。ケンはそもそも《対調》で用いられないため、丁寧形式と共起した例が見られない。

(4)　なお、表からは分からないが、東京 YA がノデと共に丁寧形式を用いているのは、下例のように「理由を表す」、「通常型」の発話である。

〔10〕

105YF:あー。で　中学生ん　時ぁ　何人ぐらいですか

106YA:いやー　ひと学年ですか

107YF:はい

→108YA:200人ーぐらい　いたのかなー、ろっ、5クラス　あってー、ークラス　40人　いますんで　200人ぐらいすね、(YF:はー)　はい。

(5)　東京 YA が丁寧形式を伴わないカラを用いているのは、以下の 4 例である。いずれも「理由を表す」用法であり、3 例が「通常型」（〔11〕～〔13〕）、1 例が「倒置型」（〔14〕）の文である。

〔11〕

→210YA:え　そー　そーですよ、だって　歩行者天国　何の　ためか　って　人が　多いから　やって　んじゃない[すか]。(YF:あー)　はい　〔東京:若ー調〕

〔12〕

→268YA:そーっすねー　一番　いーのぁ　やっぱ、東京駅が　近いから　どこでも　行ける　って　ことですよね？(YF:はーい)　はい　〔東京:若ー調〕

〔13〕

→468YA:ま　何かと　体　動かす　のが　好きなんですね？(YF:あー)　こーゆ　とこだから　余計　かも　しんないすね、{笑い}(YF:{笑い})　動かし足りない、(YF:{笑い}){笑い}　〔東京:若ー調〕

〔14〕

193YF:花火とか　見える　ところ　ないんすか

194YA:今ぁ　もー　見えないす。昔は　見えたんですけど、

195YF:あの　ビルで、

→196YA:あ　変な　ビルばっか　建ってる**から**、(YF:{笑い})　昔は　東京タワーも　見えたんすけど

今　見えないぇすね　家から、(YF:あー)　はい　寂しいぇすねー、　〔東京:若ー調〕

以下では、これらの点について解釈を試みる。

(a)　東京 YA の場合、〔10〕から分かるように、ノデが丁寧形式と（文法的に）共起できないというわけではない。しかし（1）から分かるとおり、ノデとカラの分布にはかなりの偏りが見られる。この解釈としては、以下のようなものが考えられる。

(a-1)　東京 YA の体系内では、「丁寧形式＋カラ vs. ノデ」と捉えられている。すなわち、ノデは単独で原因理由の意味と同時に丁寧さ（聞き手配慮）を表す形式として捉えられている。

(a-2)　丁寧形式が現れた場合は、カラが選択される、もしくはノデを用いることができない。ちなみに阿部・坂口（2002）では、津軽方言話者の切換えを考察する中で、発話中に丁寧形式が現れた場合、その他の言語項目も共通語形式に切換えられることを述べている（本号阿部の考察も参照）。

しかし、（ｉ）松丸・辻（2002）の結果では、丁寧形式が他の項目に影響を及ぼすということは見られない、（ii）津軽方言話者の場合、丁寧形式と共に現れるのは共通語形式（《対調》に多く見られる形式）であるが、東京 YA の場合はノデではなくカラ（どの場面にも現れる形式）である、という点で津軽方言話者のデータとは異なる。どの場面にも現れるカラが、《対調》でのみ丁寧形式に制約されるとは考えにくいため、(a-1) の解釈が妥当である可能性が高い。

(b)　上の解釈は場面と形式の分布を関連づけたものであるが、この解釈では一見例外に見える〔10〕～〔14〕が、言語的な制約も存在することを示唆している。これらの例と〔表 11〕〔表 12〕の結果を考え合わせると、ノデ・カラと丁寧形式は〔表 13〕のような分布を示すことがわかる。

〔表 13：東京 YA のノデ・カラと用法・文型・丁寧形式〕

| | 理由を表す<br>通常型・倒置型 | その他 |
|---|---|---|
| ノデ | 丁寧＋ノデ、φ＋ノデ | φ＋ノデ |
| カラ | 丁寧＋カラ、φ＋カラ | 丁寧＋カラ |

表から、理由を表す通常型・倒置型の発話ではノデが丁寧形式と共起する、もしくはカラが丁寧形式とは共起しないこともあるが、いいさし型の文型、もしくは「理

由を表さない」用法（ほとんどがいいさし型の文型で現れる）では、(a) で述べたような分布の偏りが見られることが分かる。ここから、典型的な接続助詞の用法・文型では、ノデに丁寧さが伴わず、丁寧形式でこの意味を表すものと考えられる。逆に典型的な接続助詞から外れたもの、すなわち終助詞的に用いられた場合には、ノデに丁寧さというスタイル的意味が付与され、改まった場面でも丁寧形式を伴わずに現れることができるのである。言い換えれば、言いさしという構造に支えられて、ノデは丁寧さという意味を獲得していると考えられる。

(c)　(2) から、高知 SA の切換えは丁寧さと連動しているとはいえないことがわかる。丁寧さを標示する場合には丁寧形式が用いられ、カラ・ケンは別の基準で切換えられていると考えられる。《対調》で標準語形式であるカラが多く現れることから、相手が方言話者ではない場合に標準語形式を多く使用するというような、「標準語 vs. 方言」のようなものがその基準であろう。なお、丁寧形式と共に現れる例は、以下の例のように、談話の流れから外れた注釈のような発話に多く見られる。

〔15〕

070SA:あ、そうです　あれはー　あの駅ー、だからー　あの　駅ー　あっちの方へ　ずっと　こうねえ　(YI:えー)町が。ずっと　こー。

071YI:あ、拡大して。

→072SA:うん　どって　こー、しもへ　しもへとー、(YI:はい)ま　むこ[向こう]　しもです**から**ねー。

→　(YI:はい)で　ここ　来たら　こっち　しもですけんど。(YI:ふん)宿毛では　向こうん　しもです**けん**、(YI:ふん　ふん　ふん)それでー、んま　そうゆう、{しーと息を吸う}様相で　あの　周辺へ　ま　住宅がー　あちこちん　できた　と。(YI:ふん　ふん　ふん)んね　だ、ま、団地ー　も　できたて、(YI:はい)ゆうことで　ま　変わった、と　ゆうことは　それだけのことでしょうねえ。…略…　〔高知:老ー調〕

注釈とは本来背景の情報である。このような注釈に、聞き手への配慮を示す丁寧形式が多く現れるのは、このような注釈が対話構造で用いられた場合に聞き手の理解を促すことを目的として発話されるためであろう。聞き手の理解を確認するという目的から、この部分に丁寧形式が多く現れるものと考えられる。

(d)　(3) の結果を東京 YA の場合と同様に解釈すると、高知 YA のノデ・カラにも丁寧さが付与されていると考えられる。これは、2 形式が丁寧形式と全く共起しないということからも（消極的に）支持される。しかしながら、《対調》でのみノデ・カラが見られ、《対老》《対若》ではケンだけが現れることから、高知 SA のように標準語 vs.方言という基準で切換えている可能性も考えられる。ただしこの解釈をとった場合、ノデ・カラがなぜ丁寧形式と共起しないのかを説明する必要がある。いずれにしても、今回の場面設定内ではカテゴリカルな切換えが行われているため、これ以上の解釈を進めることはできない。目上の当該方言話者（もしくは目下の他方言

話者）との談話を調査することによって、丁寧さを基準とするか「標準語 vs.方言」を基準とするかが明らかになるであろう。

(e) なお、中間言語話者にも同様に解釈できる現象が見られる。永見（本号）では、タイ語話者による原因・理由の接続助詞の切換えについて、ノデが《対疎》でのみ用いられ、また丁寧形式とノデ・カラが共起しないということを指摘している。これは、ノデが丁寧さを表示するマーカーとしても活用されており、したがって丁寧形式による表示を必要としないと解釈できるのではないだろうか。

### 4.4. 地域・年層の対照

ここでは以上の結果を、地域・年層との関係で捉え直してみる。まず、形式の点から整理してみる。〔表 14〕は、それぞれの話者が用いる形式を地域・年層との相関で示したものである。表中の「／」は、その左側の形式と右側の形式が切換えられていることを表し、左側の形式が改まった場面で現れる形式である。また、「・」は特に切換えが見られないことを表し、丸括弧は、その形式があまり用いられていないことを表す。

〔表 14　地域・年層と形式〕

| | SA | YA |
|---|---|---|
| 東京下町 | （ノデ・）カラ | ノデ／カラ |
| 高知幡多 | カラ／ケン | ノデ（・カラ）／ケン |

言語変化の点から考えると、東京 SA の段階ではノデが接続助詞としてあまり定着しておらず、また高知 SA ではノデが全く用いられない。ところが YA の段階になると、両地域ともにノデを用いるようになる。このように SA と YA の間ではノデの浸透が急激に進み、スタイル的意味を獲得するまでに至ったのである。この結果と§4.3.解釈（b）を考え合わせると、用法の拡大は典型的な用法から周辺的な用法へと起こるのに対して、スタイル的な意味は周辺的な用法から起こると考えることができるのではないだろうか。いずれにしても、このようなノデの侵入過程と、その意味の変化過程がどのようなものであったかについては、今回のデータから見ることはできない。中年層話者のデータを調べることによって明らかになるであろう。

次に、地域・年層との相関で、〔表 14〕に示した形式の切換え基準（スタイルのタイプ）を示すと〔表 15〕のようになる。

〔表 15　地域・年層と切換え基準〕

| | SA | YA |
|---|---|---|
| 東京下町 | 切換えなし | 丁寧／非丁寧 |
| 高知幡多 | 標準語／方言 | 丁寧／非丁寧<br>or<br>標準語／方言 |

高知 SA の段階では「標準語スタイル vs.方言スタイル」という対立で切換えられていた接続助詞であるが、高知 YA の段階では（用いる形式は標準語形式、方言形式であるが）「丁寧スタイル vs.非丁寧スタイル」という対立に収斂してしまっている可能性が高い（§4.3.解釈（e））。ただし、「標準語スタイル vs.方言スタイル」という基準で使い分けられている可能性もある。また、高知 YA が 3 形式を用いて接続助詞の切換えを行っていることを考えると、高知 YA の中には 2 種類の切換え基準が存在するとも考えられる。この点は、高知 YA の場面を増やすことによって検証可能である。

## 5.　まとめ

本稿では、東京下町方言話者と高知県幡多方言話者が用いる原因・理由を表す接続助詞をとりあげ、用法・文型・丁寧形式との共起関係という点から切換え現象を整理してきた。ここで得られた結果をまとめると、以下のようになる。

(a)　用法・文型の点で考えると、切換えが見られる話者の形式は、（バリエーション関係にある）全形式がどのような用法・文型でも現れるのに対して、切換えが見られない東京 SA のノデは、現れる用法・文型が限定されている。これは、ノデが文法化の初期段階にあるためであると考えられる。

(b)　丁寧形式との共起の点から見ると、東京 YA のノデ、高知 YA のカラ・ノデは丁寧形式と共に現れることがほとんどない。これらの話者は丁寧さを基準として、それぞれノデ／カラ、ノデ・カラ／ケンという切換えを行っていると考えられる。

(c)　切換えが見られる話者の場合でも、高知 SA は丁寧さを基準として切換えを行っておらず、相手が方言話者か否かを基準としていると考えられる。

(d)　東京 YA の場合、原因・理由の接続助詞の典型的な用法・文型では、ノデが丁寧形式と共起する、もしくはカラが丁寧形式と共起しないことがある。これは、原因・理由の接続助詞としての用法・文型からはずれたところで、両形式にスタイル的意味が付与されていることを示唆する。

今回の分析では場面間の切換えに注目し考察を進めたが、今後は場面内で働く制約条件にも目を向ける必要がある。中年層話者の調査や若年層話者の別場面調査と併せて今後の課題としたい。

**【注】**

1) 東京 SA の発話には、以下のように引用動詞「トイウ」に続くノデの例が多く見られた。

〔ｉ〕

050SA:うん。それを、そこの 会社でもって その、んー ＊＊ 講習が あって、(YF:はい) セルフ
→ サービスを 勉強しませんか ってゅ**んで** 俺ぁ、参加して、(YF:へーーーー) あ なるほど
→ これは いーなー ってゅ**んで**ー、それを 取り入れたの。 〔東京:老ー調〕

このようなノデは、表現としては「原因・理由」を表すものの、(a) 直接カラとの置き換えが不可能なものが多い、(b)「コトデ」と置き換え可能であることから、形式名詞「ノ」と格助詞「デ」の例として解釈した。

ただし「てゆーんで」の中には〔ｉ〕の3行目のノデ（「いーなー ってゅんで」）のように「原因・理由」を表さないようにみえるものから、〔ii〕のノデのようにカラと置き換えてもさほど不自然ではないものまで様々である。

〔ii〕

114SA:うん、(YF:はー) おんで、あの、2人が、結婚して、どっか ほかぇ 寿司屋を 出す
→ ってゅ**んで**、で 俺は、こー、{咳払い}どー しよか って ゆー、考えてた 時だったの。
寿司屋をね、
115YF:あ 潰そーか どーか ってゅ、
116SA:うん、(YF:はー) で どーせ やるんだったら 家で やったら どーだ ってゅー ことで、
そーゆー わけ。(YF:はーー、なるほど){咳払い} 〔東京:老ー調〕

なお、他の話者には「ノ＋デ」の例が見られない。つまり、東京 SA の段階では、ノデが接続助詞として定着しきっていないといえるのではなかろうか。

2) 厳密には、後件が存在しない発話でも、（話者の中では）何らかの理由を表すと考えられるものがある。発話データを分析する際に、このような「話者の意図」までを読み込むことも必要であろうが、ここでは単に後件が存在しない（そして文脈から復元不可能な）もの、もしくは存在しても後件の理由となっていない原因・理由節を、「理由を表さない」用法として扱うことにする。

3) 「通常型」で用いること自体が（論理的な順番で話すということから）フォーマルであるという考え方もできる。東京 SA のノデが「通常型」にしか現れないこととこのことが関連づけられるかもしれない。しかし、「通常型」自体がフォーマルであるならば、フォーマルな場面（東京 SA の場合には《対老》）に多く現れても良いはずであるが、実際はそうではない（本文〔表 9〕参照）。したがって、「通常型」を用いること自体がフォーマルであると捉えられているとは考えにくい。

**【参考文献】**

阿部貴人（本号）「有声化現象の切換え　ー青森県津軽地方を例にー」『阪大社会言語学研究ノート』5：64-78　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

————・坂口直樹（2002）「津軽方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』4：12-32　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

白川博之（1995）「理由を表さない『カラ』」仁田義雄編『複文の研究（上）』くろしお出版

高木千恵（2002）「高知県幡多方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』4：55-72　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

永見昌紀（本号）「タイ語母語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』5：28-41　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

松丸真大・辻加代子（2002）「東京下町方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』4：33-54　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

---

まつまる　みちお（大阪大学大学院生）
matsumaru@par.odn.ne.jp